

ダン・ニマーというピアニストを初めて聴いたのは今年（2005年）の6月、ニューヨークに滞在していたときだった。聴いたといっても、わずかに1曲ほどを聴いただけで、じっくりと聴き込んだわけではなかったなので、本格的に聴いたのはこのアルバムが初めてということになる。ただ、ニューヨークのジャズ・アット・リンカーン・センターにあるクラブ「ディーズ・クラブ・コカコーラ」でダン・ニマーの演奏を聴いたのは、先頃、我がヴィーナス・レーベルから本邦デビューした例のイタリアのアルト・サックスの神童フランチェスコ・カフィーソを聴きにいったときのことである。ほかのコンサートとのかねあいで、カフィーソの演奏を聴いたのは、その夜の最終第3セットで、演奏が終了したのは深夜12時半を過ぎており、そろそろクラブを出ようかというときになんとステージでは次の“アフター・アワー”のセットの準備が始まって、これからまだピアノ・トリオの演奏がある！ということになった。そのとき、私を案内してくれたクラブの支配人トッド・バルカンが、「これからピアノを弾く新人は注目したほうがいい。ウイントン・ケリーに傾倒している若手で、この次からウイントン・マルサリスが率いるリンカーン・センター・ジャズ・オーケストラのピアニストになる予定だ」と耳打ちしてくれたので、それではどんなピアニストか1曲だけ聴いてから帰ることにしようーということになったのだ。なるほど、しばらく経ってダン・ニマーがピアノを弾き始めるとウイントン・ケリー節が次々に飛び出してきて、すっかり嬉しくなった。その際、ステージでベースを弾いていたのが東洋人系で、それがこのアルバムに登場するデヴィッド・ウォンだった。ドラマーの名前までは、そのときは聞き覚えていなかったが、このアルバムを手にして、ビート・ヴァン・ノストランドだということが判った。なにしろ初めて聴く名前のミュージシャン達なので、ここで現在判っていることを可能な限り紹介しておく、リーダーのピアニスト、ダン・ニマーは正確な生年月日は不明だが、まだ弱冠22歳か23歳になった頃という若手である。

ダン・ニマーはウィスコンシン州ミルウォーキーの出身で、ニューヨークに進出したのは2004年1月。ピアノはミルウォーキー音楽院の著名なピアノ教授マーク・デイヴィス先生に師事してクラシックを学んでいる。この先生を通じて、ダン・ニマーはオスカー・ピーターソンを聴くように薦められ、それがきっかけでジャズに開眼。ピーターソンの後、ウイントン・ケリー、レッド・ガーランド、バド・パウエル、エロール・ガーナー、アート・テイタム、チック・コリア、ハービー・ハンコックへと聴き進んだそうだ。ミルウォーキーのハイスクールを卒業した後、ダン・ニマーはシカゴに移住して、ジャズ・コースで有名な北イリノイ大学に進学、同大学で教えていた有名なジャズ・ピアニスト、ウィリー・ピッキンズ (Willy Pickins)について1年間学んだ。大学をドロップアウトしたダン・ニマーはそのままシカゴのギタリスト、ファリード・ハーク (Fareed Haque) のグループに参加して本格的なプロ活動に入った（ハークは1990年代後半はジョー・ザビヌルのグループやダイアン・リーヴスのバック・バンドなどで活躍したギタリストで、ブルーノートから自己のアルバムも出している）。ここ数年、ダン・ニマーは自己のトリオで生まれ故郷のミルウォーキーにあるジャズ・クラブ「ザ・ジャズ・エステート」に定期的に出演しているほか、ニューヨークに進出してから、グリニッチ・ヴィレッジのライブ・スポット「55バー」などにも出演、私が6月にニューヨークを訪れた際は、マンハッタンの最高のジャズ・スポット「ディーズ・クラブ・コカコーラ」のアフター・アワーのステージをつとめていたことになる。

ベースのデヴィッド・ウォンはダン・ニマーのトリオで活動するー

Tea For Two

ティー・フォー・トゥ

Dan Nimmer Trio

ダン・ニマー・トリオ

1. ルーズ・バウンス

Lu's Bounce《 D. Nimmer 》（6：32）

2. ドゥー・ユー・マインド?

Do You Mind?《 D. Nimmer 》（6：09）

3. エンブレイサブル・ユー

Embraceable you《 G. Gershwin 》（6：15）

4. リトル・ニーリー

Little Neeley《 D. Nimmer 》（4：47）

5. コルコバード

Corcovado《 A. C. Jobim 》（6：37）

6. ティー・フォー・トゥ

Tea For Two《 V. Youmans 》（6：14）

7. ノー・プロブレム

No Problem《 D. Jordan 》（5：09）

8. イーズ・イット

Ease It《 P. Chambers 》（5：04）

9. ホエン・ライツ・ア・ロウ

When Lights are Low《 B. Carter 》（5：13）

10. ブルース・フォー・ヴィーナス

Blues For Venus《 D. Nimmer 》（3：31）

ダン・ニマー Dan Nimmer《 piano 》

デヴィッド・ウォン David Wong《 bass 》

ビート・ヴァン・ノストランド Pete Van Nostrand《 drums 》

録音：2005年8月22日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ

Ⓒ

2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan .

Recorded at The Studio in New York on August 22 , 2005 .

Engineereed By Katherine Miller .

Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura & Tetsuo Hara .

Artist Photos by Mary Jean .

Designed by Taz .

方、2005年2月にはエリック・リードのトリオに加わって西海岸にツアーしており、同5月にはドラマー、ビート・ジンマーが率いるクインテットに加わってニューヨークのキタノ・ホテルのジャズ・ライブにも出演している。

ドラマーのビート・ヴァン・ノストランドはベーシスト、デヴィッド・ウォンとコンビを組んで活動することが多く、ダン・ニマーのトリオで演奏する一方、ニューヨークのダウンタウンのジャズ・シーンで注目を集め始めているトランペットと作曲の新進チャーリー・ポーターのグループで演奏することも多い。ビートはこのほかアルト・サックスの新鋭ジュリアス・トレンティーノのグループでも演奏しており、ピアニスト、アーロン・パークスの「トリオ」というアルバムに吹き込みを残している。

いずれにしてもダン・ニマーのトリオはたったいまニューヨークのジャズ界で頭角を現し始めた最新鋭のミュージシャンによって結成されたユニットで、リアルタイムでニューヨークのサウンドがダイレクトに届けられるのは素晴らしいことだ。それではこのあとはトリオの演奏を聴いていくことにしよう。

1) Lu's Bounce

ダン・ニマーが作曲したバウンス・テンポのスインギーなオリジナル。テーマからソロに入る瞬間やアドリブの最中にもあちこちにウイントン・ケリー節が顔を出す、エロール・ガーナーのブロック・コード奏法も出てくるし、レッド・ガーランドも出てくる。後半ではバワフルな演奏になり、ドラムスとピアノのやりとりも聴かれる。

2) Do You Mind?

これもダン・ニマーの曲で、ここでテンポはミッド・テンポになる。32小節、A A B A形式で書かれており、ピアノがテーマを聴かせて、そのままソロへと移行する。トリオはここでは一丸となってスイング

している。ダン・ニマーのピアノはケリーとガーランド風が渾然一体となっている。ファンキーなタッチの演奏は、ラストにジャズ・メッセンジャーズが演奏したベニー・ゴルソン作曲の<ブルース・マーチ>風のセクションが追加されている。

3) Embraceable You

一転してスタンダード・ナンバーがテンダーなムードで演奏される。ここではひとしきりエロール・ガーナー風が強くなる。ドラムスのワイヤ・ブラシのクッションが効果的だ。

4) Little Neeley

これもダン・ニマーのオリジナル。弾むような快活な感じの曲で、このサウンドは明らかにアーマッド・ジャマル・トリオの雰囲気イメージさせる。ワイヤ・ブラシの心地よいクッションはジャマル・トリオの名ドラマー、ヴァーネル・フォーニエを思わせる。トリオは第3コーラス目からドラマーがスティックに持ち替えてボリュームを高め、ハードにスイングする。第5、6コーラスはベース・ソロが登場する。ラストの場面ではドラマーが再びワイヤ・ブラシに戻って活躍する。

5) Corcovado

おなじみのボサノバ・ナンバーが演奏される。通常よりやや早めのテンポの演奏で、主題が提示された後はトリオの独自の解釈へと発展する。ダン・ニマーは技巧を凝らしながら次第に熱気をはらむ演奏へと熱っぽく弾きまくる。

6) Tea For Two

よく知られた名曲をダン・ニマーは音を省略しながらテーマを弾いていく。このあたりの手法にもアーマッド・ジャマル・トリオの雰囲気が濃厚に漂っている。演奏は途中からイン・テンポに転じて、スイングする。後半に聞かれるブロック・コードによるパートはガーランドとガーナー風をミックスしたもので楽しい雰囲気がかもし出される。

7) No Problem

名ピアニスト、デューク・ジョーダンが作曲した映画「危険な関係」の主題曲。トリオはストレート・アヘッドな演奏を繰り広げるが、この間、ダン・ニマーはところどころに有名曲の旋律を引用して意表をつき、聴き手をニコリとさせる。

8) Ease It

ボール・チェンバースが作曲したブルース曲で、最初の録音はチェンバースの有名な「ゴー」という1959年録音のアルバムに聴かれる。この最初の録音でピアノを弾いているのはウイントン・ケリーだ。このほか現在までにロッキー・ボイドがこの曲をタイトルにした「イーズ・イット」、ケニー・ドーハムが「ウエスト42nd ストリート」というアルバムで演奏しているが、余り知られていない曲である。トリオの演奏は、ベーシストのデヴィッド・ウォンの提案で演奏されたものであろう。ここではテーマに続いてまず最初にウォンのベース・ソロがフィーチャーされる。この演奏からもわかるようにデヴィッド・ウォンはボール・チェンバースに敬意を払っている。ベース・ソロに続いてピアノも活躍する。

9) When Lights Are Low

ベニー・カーターの作曲で、50年代中期のマイルス・デビス・クインテットの演奏でも有名だ。中庸のテンポでトリオはスイングする。

10) Blues For Venus

ダン・ニマーがこのセッションのためにつくったオリジナル・ブルース・ナンバー。アルバム中最も速いテンポで演奏される。ケリー節がところどころに顔をのぞかせる。演奏の後半ではピアノとドラムスの掛け合いも登場してセッションは華やかに締めくくられる。

兎山紀芳 (Koyama Kiyoshi) 2005年10月